
科学は魔法

なすびー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学は魔法

【Nコード】

N2185BA

【作者名】

なすびー

【あらすじ】

そこは科学が進歩した世界

そこでは科学は魔法とまで言われている

その世界の高校に通うある兄妹と友達の物語

科学と言うなの魔法を使い

第一科目 入学（前書き）

初めまして小説を初めて投稿します。面白くないかもしれませんが
見て行ってくださいお願いします。

第一科目 入学

高校の正門の前。今日は入学式過去のことは忘れて新しい人生の第一歩を踏み出そうとしたとき。いきなり後ろから光の弾が飛んで来た。だがその男はその弾をすんなりかわした後さらにその弾を素手でキャッチする離れ業を見せてくれた。そしてその弾を適当に捨て優しく笑いながら撃つて来た方を見て言った。

「誰かに当たったら怪我するだろ光^{ひかり}」

「兄様とわかっていましたから私の光弾^{こうだん}を素手で止めてしまうのですから」

そう言つと手に持っていた小型の拳銃の様な武器をしまった。

「偶然だよぐ・う・ぜ・んこの高校に入れたのだからって偶然テストの問題で知っているところが出たからだよ」

それを聞いて光はそうは思わなかった。

「兄様いつもそう偶然ばかりたまには自分の力を認めたらどうです。」

そういつて頬を膨らませて言う姿はとても可愛らしいものだった。実際に可愛いのでそれ以外に何も言えない、中学の時もかなりもてていたから美女というのはまちがい無い。

「それより急ごう遅刻してしまうぞ光」

そう言つた後すぐさま光の手をつかんで早々と校舎の中に入つて行った。だがすぐわかれることになったここは実力によつてクラスを分けるのだ。どうしてかと言うとそうした方が有能な生徒を育てやすいからだ。先生の数が減っている一方なのでどうしても全生徒

を教えられない一組、三組が受けられ四組と五組が先生に教えられないというわけだ。

それを今にも泣き出しそうな光に説明している。（本人もわかっているんだろうが）

「兄様には一組に行ける力があるんですよだから一緒に行きましょうよ」

「駄目に決まってるだろうお願いだから諦めてくれ」

そう言っただけ抱きついてくる光を引きはがし仕方ないので茶髪の長い髪をなでながら「光お前は頭が良いんだからわかるよな俺のもとに偶然が起きなかつただただそれだけだ」

「う、ううわかりました兄様ごめんあさい迷惑をかけてしまって・・・でわ昼食は一緒に食べましょう」

「ああわかつたでもそれまでおとなしくしてるんだぞ」

「ハイ、わかりました兄様」

そう言うと光は早々に一組の教室に行った。そして自分も五組の教室に向かった。

教室の扉を開けたそこには生徒がたくさんいてこっちを見ている俺は空いてる席を探した。（どうやら俺が最後までいた）窓側の席が一つ空いていた。俺は特に座る席でうれしいとか悲しいとか無いので特に何も考えず席に着いた。その後バックから今ではかなりめずらしくなった本を（今の時代は小説を読むこと自体少ない）読んでいたが隣から声がかかって来た。

「ねえ、その君」

「いったい何のようだい？」

「や、特にようはないんだけどさそれって本だろ今の時代に紙の本持っているなんて珍しいね」

「ああ、これかこっちのほうを読んでる感じがして良いんだ・・・
ええと君の名前は？」

「おつと自己紹介がまだだったね僕の名前は鉄塔龍野てつとうりゅうのよろしく」

「よろしくな、俺の名前は神城強攻しんじょうけんこうって言うんだ
そう自己紹介を終えた時チャイムが鳴り始めた。

「もう授業始まっちゃうのか、てっ言っても先生もいないから各授業のマニュアルにそって自主勉強をするだけなんだけどね」

「でもちゃんとしてないと監視カメラにばれちゃうからな」
そう言つと手に持っていた本を閉じてバックから今度は薄い六角形の機械を机の上に置いてスイッチを入れたそうすると空中に様々なプログラムが展開されその中にあるマニュアルを開きそれにそって違うプログラムを新たに作り出すという授業だったその授業は今日一日までつづくのでどうせ作るならと光のためのBPバトル・プログラムを作りだすことにした。そして早速仕事に取り掛かった。そうこうしているうちに昼間になっていた。

「なあ、強攻は今暇かな暇だったら昼食を一緒に食べないか？」

「別にかまわないが俺の妹と食べる事になるが大丈夫か」

「ああ別にかまわないよ妹さん見てみたいし妹さん四組なのか？」

「いや一組だが」

そう言ったら龍野はびっくりした顔をした。

「一組だつてえ！強攻本当にそれ君の妹なの？」

「まあ見てみたらわかる」

そう言つと強攻はバツクを持って教室を出て一組に向かった。龍野も急いでバツク持って強攻を追いかけた。

第一科目 入学（後書き）

最後まで見てくれてありがとうございます。もし誤字脱字があったら感想と一緒に書いてください。後プロローグ忘れてました。たぶんそのうち第0科目としてやると思っています。

第二科目 昼食は対戦の後（前書き）

また見ていただきありがとうございます。では第二科目でございます

第二科目 昼食は対戦の後

一組の教室の前までやって来た周りの生徒がこっちを見ている（普通五組が一組に来ることがあまりないからなあ）そんなことを気にせず扉を開けた。

「光、^{ひかり}いるか」

その声が聞こえたのだらう光はこっちを向いて鞆を持ってこっちにやって来た後ろに男女二人づつぐらい付いて来ているが。

「兄様、来てくれたんですねこっちから向かいに行こうと思ってたんですよ」

そう言つて光は早く行こうとワクワクしているそしてふと兄様の隣に誰かいるのに気づいた。

「ええと、兄様この人は誰ですか？」

そして俺の隣つまり龍野は自分のことだとわかり自己紹介をした。

「ああ僕ね僕の名前は鉄塔龍野^{てつたろうの}よろしくね今日強攻^{きょうこう}と一緒に昼食を食べようと思つて」

「別に一緒に食べて良いよな光」

「ええ、もちろん良いですよ兄様」

「君たちも一緒に食べるかい」

強攻はそう言つて光の後ろにいる男女たちに話しかけた。声をかけられて一瞬びっくりしたもののすぐみんな元に戻り考え始めた。二人を除いて「ワイイ、じゃ昼食を食べるの交^{このえ}ぜてください近衛も行

くみたいだし」

龍野も強攻も近衛とは誰かと思っていると光の横にいつの間にか光と同じぐらいの背丈で黒色の長い髪を背中の方でまとめている子が光といつの間にか話しているそして近衛の名前を言った子の方を向いて

「どうせ晴海はるみが行きたがるってわかっていたから先にいただけ」

晴海と言うらしい女子は肩までぐらいの長さの薄い赤色の髪を揺らしながらこっちに来ながら

「ええ、そんなに私ってわかりやすいかなあもつと気を付けなきゃ」絶対気を付けないなとここにいるみんなが思っていた。そしてもう誰も来ないと思い光に言ってみんな食堂に行こうと思ったらさっきまで考えていた（今は近衛と晴海がこっちにいるので男子が二人女子一人になっている）男女たちの中の一人が「神城うみやまさんたちそれから五組だよいつらと食べるより僕たちと一緒に食べようよ」そういつて男子は説得させようとするが光が

「みんなで食べれば良いんじゃないの？」とか

「私は兄様と先に約束しましたから」

などと少しも諦めないで男の方も光たちと意地でも食べたいのか（光たち三人とも美少女なので出来るだけ仲良くなりたいたいのだろう）さつきから「五組は不純」だとか「五組なんかと一緒にいると腐っちゃうよ」とか五組のことばかりの悪口を平気に言っているので飽きれてきていた。でも光はそうは思わなかったように兄に対する悪口で怒りがピークに達していた。そしてとんでもないことを口にした。

「なら兄様と対戦しませんか」

それを聞いてみんなびっくり口を開けていた

「兄様が勝つたら私たちは兄様たちと食べます。もしそちらが勝つたら私たちはあなたたちと食べます。それでいいですか？」

「うなメチャクチャなあそんなことやるわけえ」

そんな無駄な争いやるわけないだろと思いき光を止めようと喋ろうとしたら

「よっしゃやあその話に乗った」

なんと相手側が乗ってきやがった。

「俺はまだやるとは言っていないぞ」

そう言う俺に光は「兄様なら絶対勝てます。だからお願いします試合に出てください」

と言われるから断ろうにも断れないので仕方なく

「わかったよでは対戦することを委員会に言わないとね」

対戦をする場合は普通先生に言いに行くんだが先生の数が少ないのでいちいち見てられないだから委員会の人たちに頼んで見てもらうことで先生に委員会から報告してもらおう形になる。

強攻は委員会のいる所にいこうとした時

「話は聞かせてもらった。」

そういつて廊下から入って来たのは

「武装委員長なぜここにいるんですか」

「まあ細かいことは気にするなそれより対戦するんだよな、だって俺が審判を務めようでわないかでわ行くか」

そう一気に畳み掛けて話をまとめてきた。こう言うのはいくら言っても聞くわけがないので仕方ないし付いて行くことになった。付いて行く途中に職員室によって行った、先生に対戦をする報告と申請書をだして自分のBPPを受け取りをおこなうためである（BPPは使い方によって死にいたらしめることがあるので職員室に預ける）今は申請書の手続きしている途中である、BPPとは現代の武器であるBPPは様々な形や大きさがあるその中で自分にあったBPPを使うことが多い自分で作ったり有名な職人にオーダーメイドしてもらう人もいるほどBPPは必要不可欠である、強攻のBPPは黒色のグローブが一組に半球型のこちら黒色のBPPであるそれを見ていた龍野が「へえ、二つのBPPを使うなんてできるのか」

「まあ今から出来るかどうか観ていると良いよ」

強攻はそう言って不気味な笑みを浮かべた。

第二科目 昼食は対戦の後（後書き）

みなさんが次の科目も見えてくれるかわかりませんがよろしくお願
い
します。

第三科目 実験は大切（前書き）

少しでも見ている方がいてうれしいです。ほとんど趣味でやっているものなので他の作品とかぶってたり誤字脱字があるかもしれません。がよろしくお願いします。では、どうぞ

第三科目 実験は大切

「すいません兄様、私があんなこと言っただばかりに」
訓練室に入った時に光がそう言った。今頃そんなこと言われても
なと思ったが

「何言っただ気にしてないよ、逆に良いタイミングだよ新作の実験をしたかったしね」

そう言いながら強攻はグローブ型のBPPを腕にはめ、半球型のは背中に付けた。そしてポケットからBPPのデータが入ったチップをBPPにインストールした。BPはBPPに組み込むためのプログラムでBPPにもよるが最高で十個までの科学式と魔法式が使えるようになる(それ以上追加すると体に異常が起こってしまう)そして準備が整ったので武装委員長の所に向かった。

「委員長、準備が出来ました。」

丁度良いタイミングだったらしく相手もやって来た。右手に拳銃型のBPPを持っていた。そして俺が二つのBPPを持っていると知り急に笑いながら

「お前さあ、二つもBPP持っているけど五組のお前が使えるわけえジャミングも知らないわけえマジおもしれえ」

ジャミング、知らないわけがないジャミングは違うBPP同士が近くで科学式か魔法式を同時に発動してしまうと起こる現象でどちらの式も発動できなくなってしまうって使う人が少ない使える人はジャミングが起こらないが大半の人が使えないのが現状である。相手は絶対勝てると思っているのだろう調子に乗って

「お前に良いこと教えてやるよ俺の人源は再生で属性は炎だ、まあ

お前に言っても意味無いんだがな」

人源とは科学の発達によって人にはそれぞれオーラが存在してそれを人源と呼ぶ人源には大きく分けて五系統八属性が存在する五系統の方は・重力グラビティ・再生リカバリー・守護ガード・発生ホルム・弾奏ショットダンスの五系統であるそして属性は・炎・水・雷・地・氷・光・風・毒・の八属性である人によって使いやすい系統と属性があるのだ

「二人とも準備は良いな」

武装委員長は再確認のためそう言つと

「はい、OKです。」

「よし、でわ対戦・・・はじめ」

そう言つた瞬間相手は手に持つていた。BPPをこちらに向けて炎の弾丸を撃つて来た。相手は勝つたと思つたのだらう満面の笑みを浮かべている、だがそう簡単に終わらせはしない俺は弾をかわすと十メートルもある所から一気に近づいた。相手は急いで弾を乱射して来たのでまたいつきに十メートルぐらい離れて相手の乱射をかわしている

「うん？なぜさっきの時に攻撃しなかつたんだ、それにあの動き一組でもなかなか出せないスピードだぞ！」「強攻つてあんなに強かつたのか凄いなあ！」

武装委員長と龍野がビックリしながらそう言つので光は自信たっぷりにこう言つた

「兄様は新作BPPの実験しているんです。兄様は今回ののはかなりの自信作でしたから」

「え、強攻つてBPPを自分で作っているのそれってBPP一級ラ

イセンス無いと作れないんでしょあれってプロでも十年はかかる代物だよ、よくそんな代物が取得できたね!!」

「それに実力もかなりのものだ動きに無駄がないあんなに実力があるんだったら一組でもおかしくはないはずだが」

武装委員長がそんなことを言っている

「兄様はそこまで魔力も科力もそこまでありません、ですから力だけで組分けをするのでしかたありません」

光は自分でそう言って自分でがっかりしていた。

「そろそろ発動するか」

そう言うのと強攻の背中 of BPP が動きだした。そうすると軽くジャンプしたかと思えば空中に浮かんだいや正確に言うとは足元に科学式が発動されてその上に乗っているようだいったいどうやって、普通は式は空中では発動されないはずなのにいったいどうやって不可能なはずの能力が恐怖を覚えさせ冷静さをなくしてしまう、相手はまた弾を乱射し始めた。強攻は空中に科学式を何回も発動させて空中を移動してかわしている、数分後相手は息を荒くしていた。もうこれ以上の実験は無理だとわかり強攻はその場で宙返りしたかと思えばなんと反対に立っているそしてそこから勢いをつけて飛んで相手に向かっている相手の方はもう戦う力がないのか何もしてこないそのまま強攻は拳を相手に向かって放った。大きな振動が起こった。相手の恐怖で気絶している顔の横に小さい穴が開いていた。

「兄様、良い実験結果が取れましたか」

武装委員長と龍野が驚いているのも気にしないで光がそう聞いてきた。

「ああ、実戦に十分に使えるなこれはかなり売れるぞ・・・それよ

り飯にしよう腹が減っちゃった早く光の弁当を食べたいな」

「え、あ、はいお兄様すぐ食べましょう龍野さん、近衛ちゃん、晴海ちゃん行きましょう」

「俺も聞きたいことがあるから一緒に食べて良いか」

そう武装委員長が言うので

「別にかまいませんよ大勢の方が楽しいですしね」

そう言って武装委員長を入れ昼食を食べに出かけて行った。

第三科目 実験は大切（後書き）

もう少し話の量を多くしようか迷っています。どうか感想とかでアドバイスをください、後よろしければ次の科目授業を楽しみにしてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185ba/>

科学は魔法

2012年1月8日01時34分発行